

抄物 ことば

壽 岳 章 子

抄物という字面には色々の訓みがあてられるでしょうが、国語学の方ではこれをショウモチ(ツ)とよまず、ショウモノといっておきます。それにはわけがあります。明治になって新しい方法をもった国語学が行われた時、それまで語学の対象としては全く埋もれていた一群の資料が人の心を惹きました。それらは多く、——抄(或いは鈔)の名を持っていたため、総称としてその資料群を抄物と呼ぶようになりました。この事情は、当時新進学徒として活躍した人々、例えば新村出博士といった方がよく御存じでしょう。そうした命名の由来を考える時、ショウモノという語は国語学史的なものを含んでいてもいえましよう。どうしてこの種のものが急に問題にされるようになったか、ショウモノにはどんな語学的価値が含まれているか、ということをおぼろげに思わせるからです。

それでは、抄物はどうなるかを定義せねばなりません。立派なそれは今のところとても出来そりにありません。せいぜいその外延を考える程度でしょう。資料の性格と、他部門に比べてこの方面に志す人が少かったこととの故でしょうか、先達湯沢幸吉郎氏の「室町時代の言語研究」のあとがとだえました。ですから、ここでも以下ほんの概略しか申上げられません。

さて、この湯沢氏の著書のタイトルは中々意味があります。即ち、内容はすべて抄物の文法研究ですが、それが室町時代の言語として考えられていることになります。抄物は国語史上大切なものになるわけです。室町ことばを知るのには、勿論キリシタン物や狂言の古いところなどを考えなければなりません。抄物も一役買います。(室町時代の言語を抄物でおきかえることは又極端だが)

いつの頃からか、五山の学僧の中、すぐれて知識ある人達はまさに幾人かの弟子達を集めて、或いは貴紳を相手として、自分の学び取ったものを伝えることを盛に行うようになりました。彼等は宗教的な階級であるほかに、当時では最も総合的な教養に富んだ人たちであったため、講義したものはただ自分たちの宗旨方面の書だけでなく、広く漢籍に及んでおります。五山の僧達の手にかかったテキストは、宗教書・文学書・備書を問わず、実に公平な態度でえらばれています。又解釈の態度も仏家の立場を固執せず、大要客観的です。こうした講義による注釈は五山だけでなく、当時の博士家清原氏に於てもなされました。もっともこちらの方は坊さんほど手は抜けず、経書方面に大体かぎられますが、

それでも今判明しているだけで相当な数になります。又神道の家柄の吉田家では日本書紀の講義などもしていました。以上のことは京畿が中心であったことは勿論ですが、(この事は抄物言語がどんな地方をもとにしているかについて大体の方向を与える)関東方面でも一時は随分盛に行われました。足利学校がその一つの中でありました。ただこちらの方は、易書・兵書・医書に関する講義が特に目立っております。パトロンであった人の方針であったようです。(川瀬一馬氏著「足利学校の研究」に詳しい)さて、こんなものが実際に色々の形で記録となって現在の私達の手に残されているのですが、それには大抵——抄という名がついています。(原典名をそのまま書いたのもかなりあるが)この「抄」は、本来この文字の意味するぬきがきのつもりでしょう。テキストの中から幾つかの語を抽いて説明を加えてゆくからです。ここで抄の種類のはん的一端をとりとめなく記しておきます。

仏書

碧巖錄抄・臨濟錄抄・人天眼目抄・四教儀抄・四部錄抄・無門関抄・六物探摘抄・蒲室集抄・百丈清規抄・葛藤集……

漢籍經

毛詩抄・春秋左伝抄・中庸抄・大学抄・論語抄・孝經抄・尙書抄・周易抄・孟子抄……

史記抄・蒙求抄・燈前夜話抄・十八史略抄……

史子集

老子抄・莊子口義……
杜詩抄・柳文抄・山谷詩抄・古文眞宝抄・中華若木抄
(但し、これは日本人の作品も多く含まれる)・四河入海・
三体詩抄・長恨歌抄・東坡詩抄・江湖風月抄・詩学大成
抄・胡曾詠詩抄……

医 医方大成論抄・格致余論抄……
兵 司馬法抄・太宗問对抄・六路抄・三略抄……
国 書 中臣敵抄・日本書紀神代抄・伊勢物語抄・職原抄……

これらの各々にはそれぞれ異った何種類かの抄があり、更にその一つ一つを基にして幾つかの写本や刊本がなっています。それらを皆含めて、今一体どの位あるものか、これはまだ分かりません。ちょっと古い寺や神社を訪うと、その蔵書目録には大抵こうしたものの幾つかがのっていますし、散佚のない所なら現に珍らしいものをあまり人に知られず持つております。禪家にあらゆる種類が豊富にあるのは、抄物の發生を思えば当然ですが、他の宗派でも學問に関心のある住職が江戸時代以前寺を持ったところなら、二つや三つ必ず抄物をととのえたようです。彼等の知的生活に必需品であつたわけです。で、今のところ抄物は種類発見期とでもいべきで、後から後から色々のものが出てくる現状です。

では、この抄物はどうなことをのせているものでしょうか。一例をおよみ下さい。

桃^{トウ} 檮^{トウ} 葉^{エフ} 暗^{アン} 鬱^{ウツ} 溪^シ……桃^{トウ} 榔^{トウ} 榔^{トウ} 葉^{エフ} ハ。注ニ。ミヘタソ。南
發^{ハツ} ニアル樹^キ ソ。日本ニテ。タトユベキ樹^キ ハ。ナイソ。画ニ。
カキタルヲ。ミタガ。チト^チ 櫻^ウ 欄^{ラン} ニ。似^ニ タソ。サウテモ。葉^{エフ} ハ
ニヌソ。寛永十四年刊三体詩鈔二之三卅ニウ)(跋文中ノ年号元
和第六)

蓼^ル 我^ガ 篇^{ヘン} に民^{ミン} 莫^ム 不^フ 穀^{コク}、我^ガ 独^{ドク} 何^ニ 害^{ガイ}、と云^{イハ} たは、世^セ 間^{カン} の民^{ミン} は父^フ ぢや^チ や子^シ ぢやと云^{イハ} て養^{ヤウ} に、なせに我^ガ ばかりをば合^カ 戦^{セン} の処^{トコロ} にはせらるるぞ

と云心ぞ。怨だ処の甚き物也。(岩波文庫本毛詩抄卷第一三五六)。(清原宣賢の講義であるこのテキストはカナ書であるが、文庫本はひらかなに直してある)

惜取——好。山へ肩毛ヲ少シハ。ノコセ。アマリ。云イ過イタ「這——急。山モ取り乱シタル云イヤウヂヤ。亦。何ニ。イソガハシイ事ガ。アツテ。云ウマジイ事ヲ云タ(天正十三年写本碧巖録抄)

男の手に成る漢籍めいたものの講義の記録ですから勿論カナです。少々とつつきが悪いようですが慣れてみますと中々面白い文体で、波多野教授がいわれる人格文の類かとも思われます。(言語生活第三号・新聞記事の非人情性)豊富な表現力があり、描写的です。その方法として例えば会話文で説明を進めていたり、多種多様の擬声語を巧みに使用して、きく者には未知である世界をまざまざと現前させています。又日本では、こういうことだという置換えも大そう親切です。何よりも当時はなしたことばを基調としている点がありがたく、語彙や文法に躍如たるものがあるわけです。禪僧達がこんなにくだけた講義をした根底には、禪宗そのものの宗教的性格を考えてもよいのではないでしょうか。他の宗派にはあまりないことでした。とにかく、物語類には登場しよらない面白い語彙、時にはとんでもない罵りのことばまで交えてそのもつ面白いいまわしの数々は、現に私どもが使っているおかしなことばの首を思わせて愉快にもなります。「シャチコハル」が既に出ているかと思えば「サシコハル」という形があったりします。「面ノ皮ガアツイ」「一ツ穴ノ土」「カンデフクメル」「歯ガ立

ヌ」「百姓太郎こんなものはかり気にしなくとも、今の「そそのかす」のたうつ」の前に「ソ、ナハカス」「ヌタ打ツ」があった、という類も知れます。老松を「コケ松」といったのは、点本あたりの語系統との関係と思わせます。現代の方言のことも考えられます。その外、室町時代独自のニュアンスを伝えるものも多く、尙意味不明の語の大群とあわせて語彙方面の興味は大きいものです。伝統的な文学には余り縁がなく、しかも狂言やキリシタン本も拾いきれなかった多くの語が如実に当時のある生活を思わせるようです。文法の方でもたくさん問題があります。活用などに關して、純粹に文語式のものはずなく、この時代特有の音便現象や活用形式をありありと示します。ただ、抄物の文はゾ・ナリ・ヂヤ(稀にはダ)等が各一個或いは二つ以上混合で文末に来るといった性格から見ても分るように、ふつうの口語を書いたものではなく、或る種の講義調がぬけきれないため、非口語的な所謂文語調は決して完全にぬぐわれておりません。(が又、案外色々の面で、例えば格の呼応や接続などで、話ことばの特長をもっているようにも思える。口語文でなく、口語であるという所が残されている抄物も多い)抄物言語の真諦とも結局関係しますが、もし抄物の基底に当時の日常言語の真相を見きわめたいならば、かなり方法論を設定しておかねばならぬことになります。しかし、イエズス会系のキリシタン本のように規範的統一的でなく、迷惑なほどいいたいほうだいであることが実に幸いすることもあります。例えば候——ソウロウ・ソウ・ソロ・ゾロ等の語の実態を知るには、抄物はなくてはならず、これは又大変形式論に墮します

が「う」「も」「ない」の場合、「ムナイ」に変化する時のさまざまが、有名な「見たむない」以外に実に豊富に残されています。去にさうもない——去ニサムナイ・ほしうもない——ホシムナイ・たまりさうもない——タマリサムナイ、といった風に。又、敬語の方面でも色々の問題が出てくるかと思われます。

要するに、抄物というものは、中々利用価値がありそうなのですが、いきなりやたらに「一つのもの」に還元してしまうのは早計にすぎるようです。というのは、話が戻りますが今ある抄物のテキスト形態が実に種々雑多であるからです。今ある多くの抄物は、(1)講者の手控え(語彙は口語的だが文法形式は大作文語調、清原宣賢の毛詩聴塵がその一例。もっともこんなものは前抄物的で抄物自体でないかもしれない)から始り、(2)それをもとに話されることを速記した第一次写本、これは乱雑なかきようで行数なども揃っていません、が少しは残っています。写本中最も多いのが、(3)転写本で、これは(2)にやや手が加えられるのでしよう、字も美しいのが多く行数や字数に狂いがありません。最後に、(4)よまれる抄物となった多数の刊本であります。ここに至って必ず原典がまず掲げられ、次に語句の解釈をする、という風に整頓された形が生じます。この刊本は(3)の写本を大体そのままうつしているものもありますが、江戸になって新しく出来たものもあって、そうなるともう大分性格がややこしくなります。(1)・(2)・(3)・(4)のそれぞれのあり方が如何にことばに反映してゆくものだろうか、そんなことも抄物の処理に考えねばなりません。

抄物にはまだ厄介な周辺問題が残されています。抄物という資

料群に接近している色々なものとの関聯もあります。(それは時代的にも、又時をこえて質的にもあるわけだが)一番困るのは仏書などを扱う時原典がその道の人でないし容易に分らないことや、禅僧達の持つ法号の複雑な事等で初めての者を戸迷わせます。あれやこれや、虫喰い本の多い事やでうんざりすることも確かに多いのですが、それら一切のあとにやはり抄物には抄物でなければ分らない言語的事実が私どもをつよく誘います。まず目録を作ることから出発せねばならぬほど手がつけられない部門ではあります。が、さまざまの点から国語史上に一つの燈となるものであらうと思われます。